

『悲しみの秘義』

2020年03月19日

若松英輔氏の『イエス伝』を読んで、感銘を受けた。若松氏は、聖書を下記のように捉えている。聖書に記されたイエスのコトバは言語だけでなく、根源的な意味を指し示し、その根源的な意味が彼方なる世界との交流を日常的に生きることへと導く。人間界における価値・無価値を定める座標軸から離脱し、思想の知解ではなく、存在することへの転換である。イエスが説いたのは真実の自由であり、この自由は法的権利ではなく、超越への思慕である。祈りは人間の魂の沈黙を実現することで、イエスに神のコトバを聞くことであり、そこに、神への願望の訴えや自己を深める営為ではなく、他者に向かって開いていく自由がある。私が最も心を打たれたのは、十字架の上で「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」というイエスのコトバは、神への絶対的信頼と耐え難い苦悩の呻きは矛盾しないという若松氏のイエス理解であった。人間の悲しみ、苦悩は、神への深い信頼と同時的である。若松氏の心の柔らかさ、人への優しさは、ここにあると思う。

若松氏が著した25編のエッセイ集『悲しみの秘義』を読み、言葉の奥深さ、その確かさを改めて知らされた。多大な感化をもたらした思想家、詩人たちの言葉を引用しながら、若松氏らしい光を当てて、読者を心の奥底にある生きる喜びに目覚めさせている。

人は誰でも「生きる意味」を求めている。アウシュビッツの地獄から生還したフランクルは、人生とは何かを問うことではなく、人生からの問いかけに応え続けることだと言い、『それでも人生にイエスと言う』に「人生に期待できるかではなく、人生は私に何を期待しているかである」と書いている。若松氏の師は井上洋二神父である。若い若松氏は精神的に行き詰まっていた時、聖書を読む会で、聖書の矛盾について、十数分語り続けていると、黙って聞いていた井上神父が「信仰とは頭で考えることではなく、生きてみることでないだろうか。知ることではなく、歩いてみることでないだろうか」と言った。この一言が若松氏を変えたと言う。井上神父は「宗教は考えて理解するものではなく、行為として生きて、体得するものです」とも書き残している。フランクルの言葉通りである。

『悲しみの秘義』は悲しみに焦点を合わせている。「かつて日本人は『かなし』を『悲し』とだけでなく、『愛し』あるいは『美し』とすら書いて『かなし』と読んだ。悲しみはいつも、愛（いつく）しむ心が生きていて、そこに美としか呼ぶことができない何かが宿っているというのである。…人生には悲しみを通じてしか開かない扉がある。悲しむ者は、新しい生の幕開けに立ち会っているのかもしれない。」若松氏は、多くの人たちの死について語っている。奥様も失っている。愛する人を失った悲しみは、癒し難いもので、見ることができず、触れられず、声も聞こえない。しかし、その別れから、以前とは違う近さを覚える。私の友人は奥様を失った。彼のブログには、「今日は（妻が）帰天して9日目ですが、日を追って彼女との生前の生活のこと、彼女がどんな思いでいたのかなどが、私の脳裏を駆け巡っています。彼女はもういませんが、これらもずっと彼女と一緒に生活が続くように思っています。」と書いている。友人にとって、奥様との関りは、生前と変わらぬ深いものになっていくのではないか。

若松氏は、死別は逝った人たちの声なき声を聞き、言葉を失う沈黙は人を生かす言葉を生み出し、暗い孤独は新たな友人を発見し、祈りは情愛の発露となる行為を作り出すと言う。悲しみは生きる力をもち、深みから人生を祝福する。この秘儀を体得した者は、自分と他者を愛しむ心で、今を生きられるのではないか。